

超セレブ貴族の家庭を暴く 道綱の母

平安時代の貴族階級の女性であるが、名前はわからない。清少納言や紫式部より少し前に生きた女性で、「蜻蛉日記」の作者として今日に知られている。

藤原摂関家の貴公子・兼家の愛人として過ごした21年の想いを記録した「蜻蛉日記」で、兼家への愛憎を赤裸々に綴っている。下世話に言えば、亭主に対する恨みごとやら本妻（時姫）や他の愛人（町の小路の女）らへの嫉妬など、読んでいてあまり楽しいとはいえない内容でもある。

のちに政治の頂点に君臨する摂政（幼い天皇に代わって政治を司る）となる藤原兼家の家庭問題を暴く、週刊誌も顔負けの暴露本とも言える。

永井路子はその著「歴史をさわがせた女たち」のなかで、王朝版「夫に嫌われ方教えます」と書いている。当時の貴族階級における結婚は「通い婚」、夕方殿方が女性の家に赴き、朝方、役所や本妻のいる屋敷に帰ってゆく というのが普通だった。

男性は当たり前の生活を送っているのに、女性の本音はそうはいかないということで、彼女は切ないその心情を正直に書いているのである。

以下幾つかその思いを和歌に混じえて紹介する。

若き日の兼家から求婚の手紙を貰って「紙なども例のやうにもあらず、いたらぬ所なしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。（紙などもひどいもので、見苦しい所がないと聞いていた筆跡も、とれも本人のものとは思えない悪筆だ）とぼろくそに腐さしている。

ある日の夕方、兼家が方違えと称して違う方向に出て行ったので、怪しいと思って跡を就けさせると、町の小路のどこそこに車を止めたと報告してきた。「やはり思ったとおりでわ」つらい想いをどうすることもできない。2、3日経って兼家が訪れてきたが（いまいまいので）門を開けないでいたら、彼は例の女の所に行ってしまった。

「嘆きつつ一人寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかわ知る」（意地張ってみたがやはり独り寝は夜が長くてさびしい）小倉百人一首に収録されている彼女の歌である。兼家は最初こそ足繁く通い、文も頻繁に送ってきていたが、そのうち足が遠のいていく。

兼家の正妻・時姫も、兼家の足が遠のいていると聞いて、同病相哀れむとばかり「そこにさへかるといふなる真菰草いかなる沢に根をとどむらむ」（あなたの所からも離れているあの人はいったいどこに居続けているのでしょうか）これに対して時姫からは「真菰草かるとは淀の沢なれやねをとどむてふ沢はそことか」（あの人が留まっているのはあなたの所と聞いていますが）とにべもなく、道綱母に対し反発を露わにしている。

1人息子・道綱の成長を見守る母親の心情にも触れながら、兼家が朝廷で昇進していく過程で、彼の足が遠のき恨めしい気持ちを吐露しながら21年も関係は続くのである。

なお、道綱は兼家との間にできた子で、妾腹の故昇進が遅れるが、正二位・大納言まで出世する。